

淫らなりアスは決して
負けないッ！

おーり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

負けてるウー……ッ！

目次

淫らなりアスは決して負けないッ！

1

淫らなりアスは決して負けないッ！

「ん、くうう…っ、太、い、わね…っ」

こうして繋がるのは二度目だが、中々に慣れない。

不満を口にするのを弁えもせず漏らし、自らの膣口を押し広げる肉棒を無理矢理に呑み込んで、リアスは少年の身体へ全裸で跨った。

身体を使つた交渉など不慣れなモノで、それこそ性交渉しか彼女には思いつかない。腰を沈めるたびに揺れる、年齢不相応なバストに少年の目線が釘付けとなっているのがわかる。

だが、自分の『恥』を既に把握している少年が、この乳房で顔を挟み込む程度で『云う事を聞いてくれる』ようにはリアスには自信が持てなかった。

胎と腹が重なるほどに近いふたりの距離。

リアス自身、己の身体を支え切れずに少年の肩へ腕を回して、抱き着く様な姿勢に既になっっている。

顔を埋めるくらいに近いの接近にも、成っている。

「……………」

ぱふ、と。

リアスは無言で自分の乳房を、少年の正面に押し付けた。抱き着く様な姿勢のままに、ぐいぐい、むぎゆむぎゆと。

自分の乳房が少年を蹂躪しているような、そんな錯覚を感じる。

「ん、あ、あん、つや」

その優越感が、リアスに自然な嬌声を上げさせていた。

己でも知らぬうちに、彼女の表情は恍惚に染まり、火照った吐息が絶えず漏れる。

「……リアス先輩、発情するのは構いませんけど、」

「んっ、ふうっ…… ——んぎいっ!？」

ズグ、と杭で穿ったような衝撃を感じた。

リアスの子宮が潰されたのだ。

「こつちを優先してほしいんですけどねえ。中途半端じゃ、生殺しだ」

「あ、あう、あ……くっつ……!」

胎を貫いていたのは、彼女が呑むことを停めていた少年の肉棒。

突き上げられたことで押し込まれた、少年のソレが、発情していたリアスを『まともにする。』

——そうだ、彼専用のオナホールとしてご奉仕すると、すでに私は契約してしまつて

いるのだ。

——雌猫のように発情することよりも、雌豚のように卑しくならなければご奉仕足り得ない。

——それだけの対価を支払わなければ、私の悪魔としてのプライドすらも失われてしまうではないか。

それらの『事実』を思い出したリアスは、痛みに呻きながらも笑顔を作る。

少年の顔から乳を外して、腰を重ねたまま両の手でピースサインを顕わとして見せた。

「も、もうしわけありません、ごしゅじんさまあ……♡ いまから、リアスのおマンコで、オチンポさまにごほうし、いたしますう……♡」

その言葉に、不満げだった少年は歪に嗤う。

改めて恰好を顧みるが、リアスは己の肢体を惜し気も無く晒していた。

自重を支えられないほどに豊満な乳房は、熟した果実のように垂れている。

しかし若い肌には張りがあり、乳首はツンと勃って上向き。

リアスが微笑うことで力が脱けたであろうに、その双丘は前へと突出することを失いもしない。

少年の腰に跨ったリアスの胎には、振り返った肉棒が窄まった膣に嵌まっている。

少年が命じるまで、彼女の姿勢はそのままだ。

奉仕を命じられれば、僅かばかりの抵抗を見せつつも腰を上下に揺すり出すのだろう。

そんなリアスの下の腹には、ハートを象った紋章が桃色に鈍く輝いていた。

その【淫紋】こそが、リアスを浸食して、犯して作り替えている最大の要因である。

静かに、僅かずつにだが確実に。

遠回しにだが躲せず、防ぐことも出来なかった『攻撃』に、リアスは敗北を喫したのだ。

赤髪の滅殺姫は、アへ顔ダブルピースで敗北宣言を晒すことしかできないのであった。



オプセンス・デコレイション
【刻みつける紋章】、それがこの神器の名前になる。

効果は見ての通りの『認識阻害』。

発動体はチ●コである。

効果の発動条件は、発動体で『触れる』こと。

肌に触れても効果は発揮できるが影響は弱く、粘膜接触した方が効果持続も長持ちする。

…要するに、女の子に云う事聞かせたかったらセックスしろ、というクソみたいな神器である。

誰だこんな俺に嵌め込んだ奴ア!!?

そんなの出来るなら童貞じゃねえよ!

目的と手段が同居してんじゃねえか!

最初のハードルが最終ハードルなのはどいう了見だコラア!?

…さらに云うなら、戦闘用とも後方支援とも言い難いので、見事に何処の陣営にも要らん子扱いされるであろうことは容易に想像がつく。

むしろ身内に引き込んだが最後、効果を発揮するために使って見せれば内側から腐らせること必至なので、遠くない未来に指名手配に晒されても可笑しくないのである。

ハハハ、笑うしかねえ(滂沱)。

こんな神器で戦闘力がインフレ興す学園コメディ乗り越えられるわけがねえだろうがあ!!!

転生神呼んで来い! 特典ガチャをもういつかい引き直させろやアーーー!!!

「アツ♡ アツ♡ アツ♡ アンアツ♡ しゅごつ、ふかつ、いつ、キモチつ、イイツ♡」
誰にも邪魔されない『彼』の部屋で、リアスは嬌声を上げ続けていた。

悪魔の証しである翼や尻尾を晒す開放的で自然な姿と成って、少年の腰に跨って悦びに啼く。

兵藤一誠の家では『こう』は往かない。

オカルト部の、自らの眷属らが同居しているし、恋しているイツセー本人は充てに出
来ない。

乳房を筆頭に女体への興味は尽きない少年なのだが、性行為自体には消極的なのだ。
積極性に対してリアスがどうこう言えた話でも無かったが、そもそも其処はイツセー
の家族が同居している。

元を質せば兵藤家を改築したのが其処なので、それに対してはどうとも言えない。

しかし、悪魔であることを隠匿しているリアスらが曝け出すわけにもいかないの
で、やはりこういつた開放的な行為には耽られないのが現状である。

「んああアアーっ♡ イっちやううううーっ♡」

幾度目かの絶頂を味わい、リアスは背筋を仰げ反らせた。

ぶると弾んだ乳房の先端は勃起したようにぶつくらと膨らんでおり、サクランボのように熟れたそれが今にも果汁を噴き出しそうなほど痙攣する。

そうなった乳房を掴まえて、少年がリアスを引き寄せた。

果実を挽ぐかのような乱暴さだったが、痛みを訴えることも無くリアスはされるがままに少年の胸元へと倒れ込んだ。

「何度目ですかあ、リアス先輩？ 俺より先にいくとか、『ご奉仕』の意味わかってますう？」

「ご、ごめんなさいい…♡ で、でもお…♡ 貴方のオチンポ、気持ち良すぎてえ…♡ 挿入^{いれ}るだけで、イっちゃいそうなのよお…♡」

リアスが恋をしているのは兵藤イツセーだ。

それは彼女自身が、胸を張って言える。

だが、身体の相性はどうか『彼』の方がずっと『良い』らしい。

火照った感情のまま、蕩け切った娼婦のように少年へしな垂れかかる。

リアスは己の身体を自負している。

恋しているイツセーに賛辞されるまでもなく、大きく美しい自身の乳房にも、誇りを持つ程に自慢としている。

それを素肌へと、惜し気も無く押し付けられる。

重量感、滑らかさ、体温、あらゆる男性を魅了するであろうその全てで、リアスは少年への慰撫を『建て替えよう』としていた。

「ハア…、駄目だね。リアス、雌犬の姿勢を取れ」

「…っ♡」

それは『最後通告』だ。

『奉仕』が足りなかったことへ対する、少年自身の叱責と対処。

『それ』を命じられることはリアスの矜持上、決して受け入れて良い『命令』ではない。

だが、

「…返事は？」

「くくくっ、はあい♡」

まるで『恋する乙女のように』に、悦びと歓喜に満ち足りた笑顔で、リアスは『命令』を受諾した。



「んあああつ♡ らめえつ♡ イクイクイクうつ♡ またいつちやうのお♡
いつたばかりなのにつ♡ またいつちやううううー♡♡♡」

四つん這いになったリアス先輩を、後ろからズンズンと犯す。

神器の一部と成っている代償なのか、俺のチ●コは普通以上にご立派で、熟せる回数も日に数回から数十回と余裕がある。

加えて、神器としての性質上、【淫紋】との相互作用が働くのだ。

「はあ、ん……っ♡ ダメなのにい……♡ あなたのオチンポに、どうして逆らえないのお……♡」

言葉の調子は疑問を抱いているようだが、腰を振るのをいったん抑えて抱き着いて、もみもみたぶたぶとおっぱいを弄つても拒絶されることも無い。

正面から来た時は顔に出さなかったが、重量感と云い質感と云い、極上の乳と評されるのは伊達では無い。

色合いだつて薄桃色の美麗なそれを、恐らくはイツセー以上にもみくちやに出来てい

る。

その根本的な理屈は、リアス先輩がチ●コに完全敗北している為だ。

神器の発動体であるチ●コは、それから発せられる波動を受け止める【淫紋】を受動体として下位に置く。

【淫紋】を植え付けるためには粘膜接触する必要があるのだが、発動体^{チ●コ}で【淫紋】の効果範囲内に触れ直すと伝達する波動の後追いで快感に似た感触を味合わせ

それが子宮で感じられるとなれば身体の相性がメツチャ良い、と勘違いされるも同然なのである。

「あひいつ♡ あんまり乱暴なのはやめてえっ♡」

2年生が修学旅行に行つたばかりなので、時系列的にも4期くらいか。

それくらい『絆』を繋いでいるだろうにも関わらず、尻をパンパンと叩くように腰を振つても、リアス先輩の喜悦に塗れた悲鳴は曇りもしない。

衝撃で撓む尻肉も、俺の興奮を尚も反り立たせるくらいである。

「くっつ、オラっ、イクぞリアスっ！ 孕めっ、俺の子を産めえっ！」

「アアくっ♡ だめっ♡ だめえっ♡ だめなのおっ♡ なかにだしちやだめえっ♡」

言葉『だけ』の抵抗で、リアス先輩は悦びの悲鳴を上げた。

どぶどぶどぶっ、とゼリーののように濃厚な精液が吐き出され、膣の隅々まで行き渡つて子宮を浸食して征く。

「だめなのお……♡ 熱いのお、これいじょう注がないでえ……♡」

上から覗いていると、彼女の腰にもうっすらと「淫紋」が浮かぶのが目に入った。

これで前と後ろに重なるように染み渡つたことが確実となり、込められる『認識』も増えたはずだ。

目指すはイッセーハーレムのイイトコ取り。

俺をこの世界へ紛れ込ませたことを、後悔させてやるッ！
誰とは云わないけどなッ！